

## いい土を作ろう こひつじ幼稚園（北海道札幌市）

[5歳児]

### 事例1 北海道の長い冬が終わった春、ミミズやワラジムシなどの虫取りが始まる

#### <ミミズ>

「けっこう湿った土だよね」  
 「そろそろミミズがいそうだな」  
 「頑張って掘るか」  
 「太いミミズがいたぞ。やっぱり、フッカフカの湿った土にいるんだ」  
 「ここって、夜みたいに暗いよね」  
 「どうしてミミズもワラジも暗い所が好きなんだろう？」  
 「ミミズは、深い地球から来るんだよ」「だから暗いところが好きなんだよ」  
 「どうして、目がないのに眩しいって思うんだろう？」  
 「眩しいって、心が思うんじゃない？」



#### <ワラジムシ>

「ワラジとナメクジは、友達なの？」  
 「そうだよ。仲がいいんだ。同じ石の下がお家だよ」  
 「どっちも、お日さまが嫌いなんだよ」  
 「暗い所が好きみたい」  
 「どうして暗い所が好きだってわかるの？」  
 「石の下にたくさんいるんだよ。石の下は、絶対お日さまが当たらないんだよ」  
 「石の下は安全だしね」  
 「明るい所に置くと、暗い所を探して走るんだよ」  
 「走れないナメクジは死ぬんだ。眩しくてね」  
 「足は14本もあるから、けっこう早いぞ」  
 「ほうら、暗い所に急いで走ってる」  
 「こんな風に土にいたんだ。ワラジの身体は柔らかいぞ。嫌な時は、身体を丸くするんだ」  
 「湿った所にいるんだよ」  
 「冷たい土の所が好きみたい」  
 「誰にだって苦手なことはあるよね」  
 「暗いところは、命を守りやすいんだよ」

### 事例2 ミミズへの疑問

ミミズ探しを夢中になって楽しむことで、「ミミズは何を食べるのか?」「土の中で何をしているのか?」「長生きするのか?」「ミミズが怖がる虫は、何だろう?」「どっちが頭だろう?」「なぜ、足がないのだろう?」「どうしてヌルヌルしてるのか?」様々な疑問をもつようになった。

「幼稚園の畑にはミミズはいないよ。一匹も。どうしていないんだろう?」  
 「秘密の場所にはでっかいのがいるよ。暗くて湿った所だから」  
 「ミミズのウンコが栄養の土にしてくれるんだって?」  
 「秘密の場所を畑にするかい?」  
 「じゃあ、幼稚園の畑は栄養が無いから、肥料をたくさんあげないと野菜は育たないわ!」  
 「だめだよ。暗いもん。狭いもん。野菜を育てるのにお日さまが必要なもの」  
 「ミミズのいる土はフッカフカだな。虫のお布団だな」  
 「土の中は地球の奥まで暗いからミミズは生きられるけど、ずっと土の中で生きているのかな」  
 「ウンコだ!土と同じ色をしているよ。栄養ってことだよ」  
 「大事な栄養だから、畑に入れて」



### 事例3 コンポスの土が欲しい

保育者の提案により、近隣の家にあるコンポストの中を見る。子どもたちにコンポストの説明をすると、ミミズがウヨウヨと塊になっているはずだと想像し、瞳が輝く。



「持ったか〜い！」と子どもたちから声がかかり、一人ひとりが持っている虫眼鏡をみんな忘れずに手にしていた。保育者もあわてて手に持ち出かける。

コンポストの中から土の塊が出て、大歓声上がる。

「ワラジがいる。見たことのない虫もいる」

「虫眼鏡で見ると、小さな小さな虫がたくさんいるよ」

「卵の殻があるね。骨もある。誰か死んだのかな。怖い感じ」

「食べかすを入れたのに、どうして土の塊になっているの？土も入れたの？」

「肉は、虫たちが食べたんだな」

「みんな！いっぱいミミズがいるよ」「ミミズだ！」「ミミズがいっぱいいる原因がわかったぞ！」

土を触り「栄養の土だものね」「コンポストの土ってフワフワしてるね」「なんか、あったかいぞ」

「ミミズは土をあったかくするのかもしれないね」

「ミミズって、土の中で栄養の土を作るお仕事をしているんじゃないかな」

「じゃあないかな」

「ところで、ミミズは何を食べているんだろう？」

「土の中の水を飲むんじゃないかな」

「地球の土を守ってるんだな」

「虫眼鏡でやっと見えるちっちゃな虫を食べて、栄養のウンコをするんじゃないかな」

「じゃあ、この土はウンコなの？」

「先生が“ミミズは畑のお宝”とか“土の神様”とか言っていた」

「虫がご飯って言うことじゃないのかな」

「きゃー！！土って虫のウンコだったんだよ。きっと。お母さんも知らないと思う。『きゃー』って言うだろな」

「ミミズってすごいよね」

翌朝、子どもたちはまた園庭でミミズ探しに夢中になる。既に畑に作物を植えた時、ミミズに出会わなかったことに子どもたちはひっかかっている。

「幼稚園の畑は栄養のない畑だ」と言う。

「コンポストの栄養の土を幼稚園の畑にもらえないかな。そうすれば、いい野菜が育つと思うんだ。ミミズも連れてこようよ」と話し合いお願いすると、土だけでなくコンポストをもらえることになる。その後、子どもたちは登園するとコンポストへ向かい、家庭から持参した生ごみや園庭の枯葉などをコンポストに入れることを楽しむ。コンポストの中を観察する。



## 考察

子どもたちは虫探しを通して、いつの間にか土作りやそこに実る作物に関心を広げていっている。知らなかったことがわかり、わかったことを実践できる環境こそ、幼児の本当の力を育てるのだと感じた。そして、そのことはとても楽しいことだと思った。

コンポストの土の中で動く虫たちを真剣に見つめていた。コンポストの土はミミズが食べた糞の集まりで、栄養のある土だということがなんとなくわかってきた。ミミズについて知りたかった数々の疑問の答えを追い求めるうち、栄養のある土がどのように作られていくのか知ることができた。

また、ミミズの仕事ぶりに感心し、さらにミミズに愛着を感じていることが伺えた。様々な推測をすることや、事実を知るところを繰り返しながら、物事への興味がどんどん深まっていくことを改めて知った。

## ポイント

大人には素朴に思える“ミミズやワラジムシ探し”を通して、子どもたちは明暗や湿り気、季節や温度、土の固さや色・質感など様々なことを感じ取り、思考を巡らしていることがわかります。栽培活動でも目的意識や期待感をもって主体的に活動をしているからこそ、“ミミズと畑の土”の関係を意識し、「いい土を作る」という活動に展開しました。保育者は子どもの発想や探求を引き出す環境や情報を提供し、より意欲的に進められるように支えています。